

# 農民工は「悪魔の挽き臼」にすり潰されたのか

——農民工から読み解く「擬制」の概念

原田忠直

はじめに

「悪魔の挽き臼」とは、K・ポランニー<sup>①</sup>が、『大転換』を始め、多くの著書のなかで用いた言葉である。簡潔にいえば、「労働と土地のための自由な市場を構成する諸市場のシステム」[ポランニー 2015: 76]、すなわち、「自己調整的市場システム」を比喩的に表現した言葉である。そして、この「自己調整的市場システム」が成立すれば、「悪魔の挽き臼」は回り出し、「人類は死に絶え、自然はこの盲いた挽き臼のなすがまま、塵芥になるまで破壊されるだろう」[ポランニー 2015: 77]と、まるでダントの煉獄篇を彷彿させるような世界観を描き出す。しかし、ポラン



ニーが指摘するように、「悪魔の挽き臼」が回り続け、人類が死に絶えるような状況が、「現実」に存在したことは過去に一度もない」[ポランニー 2015: 77]。つまり、「悪魔の挽き臼」とは、どこまでも「自己調整的市場システム」の比喩的な表現である。

ただし、「悪魔の挽き臼」に放り込まれ、人びとが「家庭や親族から引き離され、その根を断ち切られ、彼らにとって価値ある環境すべてから切り離され」[ポランニー 2010: 143]、「浮浪する群衆」[ポランニー 2010: 59]へと転換するというポランニーの見解は、決してたとえ話の類として一蹴することはできない。少なくとも筆者が生活する日本社会において「浮遊する群衆」、より具体的にいえば、「孤立した人びと」を見出すことは容易である。ま

た、ポランニーは、このような変化を「経済が社会的諸関係の中に埋め込まれているのではなく、反対に社会的諸関係が経済システムの中に埋め込まれている」[ポランニー 2010:143]とし、経済システムによって支配される社会が、一九世紀から二〇世紀初頭の西欧世界（とくにイギリス）において誕生したとするとともに、この変化を歴史的な「大転換」と位置づける。もっとも、この「大転換」とは、どこまでも西欧世界を念頭にして描かれたものであるが、西欧世界に限らず、市場経済を導入した社会の未来像、あるいはかなり確率の高い予言のような扱いを受けていることも事実である。

つまり、このポランニーの予言に従うならば、改革開放後、中国において市場が導入されたことは、中国で暮らす人びと、そればかりか自然も含め、すべてが「悪魔の挽き白」のなかに放り投げられ、ゴトゴトと音を立てながら、すり潰されていく過程を辿るだろう、という一つの未来像を予め用意することになる。実際、ポランニーの予言に従い改革開放後の中国、なかでも農民工をその挽き白に放り込まれた存在であると捉える研究者は少なくない。

たとえば、ポランニーの論文や講演原稿などを収集した『経済と自由』の翻訳者の一人である福田邦夫は、『経済と自由』の解説で市場導入によって農民工を取り巻く環境を次のように述べる。「先進工業諸国の生産工程を忠実に受

け入れて華々しい経済成長を記録し続けている第三世界では、急激に進行する脱農村化の波に洗われて行き場を失った人びとの群れが、中国の農民工に象徴されるように資本の餌食にされ、悲惨極まりない地獄のような世界にたたき落されている」[ポランニー 2015:358]。

実際、後述するように筆者が、一九九〇年代初頭に、その五感で捉えた上海市近郊農村で暮らす農民工の生活とは、「悲惨極まりない地獄のような世界」そのものであった。また、彼らは、低賃金・長時間労働、「ぎつい・きかない・きけん」といった3K労働の現場のなかですり潰されていくようでもあった。さらに、中国固有な戸籍制度の下、都市住民のように都市の政府から保護されず、農民工は無抵抗なまま、真つ先に「悪魔の挽き白」に落とされていく存在に映った。

しかし、農民工は、故郷から離れ、都市で生計を立てる過程で、本来に、「悪魔の挽き白」によって、「浮浪する群衆」へと引き裂かれていったのだろうか。あるいは、彼らが故郷で慣れ親しんでいた社会的諸関係から引き離され、半ば剥き出しの状態市場に対峙し、資本の餌食となったのだろうか。

筆者は、おおよそ三〇年近く農民工研究を進めるなかで、彼らを市場のなかで、経済成長の犠牲者のように捉え続ける視点に疑問を抱いている。もちろん、そのような視

点を頭から否定するつもりはないが、その背後には、前述したボランニーが描いたイギリスを始めとした西欧世界が辿った道を、日本が歩んだように中国も辿ることになるだろうという先入観、あるいは、グローバル化の浸透によって生じる悲惨さのシンボルとして農民工を利用しようとする思惑が潜んでいるようでもある。少なくとも筆者は、このような先入観や思惑とは、中国経済の理解を阻む一つの障壁ではないかと考えている。むしろ農民工が抛り所とする地縁・血縁者のネットワークの存在、とくに、そのネットワークを核として行う経済活動の背後に、中国経済の特殊性を読み解く上で、重要な知見が隠されていると確信している。

もともと、筆者の農民工研究を振り返れば、先入観や思惑のなかで揺れ続けていたことも事実であり、本論では、そうした揺れ、より正確に言えば過ちを隠すことなく紹介したい。そして、そうしたいくつもの過ちを犯しながら、農民工から読み取った知見、すなわち「擬制」という一つ概念に辿り着くまでの過程を明らかにしたい。

## 一 農民工を取り巻く劣悪な生活環境

筆者の農民工研究<sup>3)</sup>は、一九九〇年代半ば過ぎ、留学先の大学の裏門で、飲食店で働く山東省出身の一人の女性と知

り合ったことから始まる。彼女が暮らしていた上海市郊外の「五一村」<sup>4)</sup>で、彼女の同郷人と知り合い、さらにその後、「五一村」やその周辺で民工子弟学校を運営していた江西省出身者などとの繋がりを深めていった。以下では、筆者が「五一村」で遭遇した農民工の様子を明らかにしたい。

「五一村」は、上海市の人民広場から西北に約一五キロメートル、自転車で約一時間半程度の所に位置していた。村の人口（上海戸籍を持つ者）は約二〇〇〇人、戸数は約八〇〇戸であった<sup>5)</sup>。まだ多くの農民工が暮らし始める以前、上海市の農業戦略として、市街地に隣接する農村は野菜の供給基地として位置づけられ、「五一村」もその戦略を担う地域に含まれていた。それゆえ、地元住民が暮らす集落の周りには畑が広がり、そこにはスプリングラーが設置され、温室が建てられ、さらに品種改良センターなどの施設までが揃っていた。実際、一九九〇年代の初頭、筆者が自転車で畦道を走っていると、農作業に勤しむ農民たちの姿を目にすることができた。

ところが、一九九〇年代半ばを過ぎた頃から、「五一村」の様子は大きく変化する。周辺の畑は潰され、集合住宅、ショッピングモール、遊園地などが建設され始めた。ただし、集落はまるで新たに建設された建物に隠れるようにして残された。そして、そこに多くの農民工が生活するようになった。その要因の一つは、地元住民が離農に伴う

収入補填をするため、自宅の部屋を農民工に貸し出したことによるが、一九九〇年代半ばには、約五〇〇〇人の農民工が暮らし、その数は、地元住民の約二・五倍に達した。そして、急速な人口増に伴い、「五一村」の生活環境は大きく変わることになる。

なによりも目立ったのは、集落内にあふれたゴミと糞尿である。鼻が曲がるほどの異臭が漂い始めた。ゴミは集積場からはみ出し、クリークはゴミで埋まり始め、猫と見間違ふほどの大きなネズミがゴミの上を走り回っていた。また、公衆トイレに入れば、真つ黒な煙が舞い上がるようにハエが飛び交い、身体中にまとわりついた。ほんの数分、トイレに滞在すれば、肌やシャツに茶色い斑点が無数につき、身体から悪臭が放たれた。さらに、水道の蛇口をひねっても水は少ししか出てこない。そのため、すでに破壊されていた井戸を再利用し始めたが、その水は白く濁り、目にしただけで健康を害するものであることがわかった。このような生活環境の劣悪さは、いうまでもなく、大量の農民工の流入、すなわち集落の生活可能人口の許容範囲を超えたことが原因であった。ただ、その原因が何であるかを考えるよりも、筆者は、それまでの人生で一度も目にしたことがないほどの劣悪な光景を前にして、たじろぐ以外に術がなかった。その上、留学先で知り合った中国人の大学教員たちは、「五一村」は、「危険すぎるから行っては

いけない」、「外地人は教養がないから付き合わない方がいい」と、「五一村」における調査をやめるように注意を受けた。しかし、そのような忠告は、かえって心に火をつけるだけだった。筆者は、より深く農民工たちの懐に飛び込み続けた。

ベッドと食事用のテーブルが置いてあるだけの殺風景な部屋、窓は小さく薄暗い小さな部屋で、農民工たちと語り合い、食事をし、酒を飲み、歌を歌い、酔い潰れ土間に敷かれたゴザの上で朝を迎えることもあった。このような調査、正確にいえば農民工と世間話に花を咲かせ、夜になれば白酒を煽るだけなのだが、農民工は、知人の大学教員たちがいうような危険で、無教養な存在ではなかった。

もつとも、近づき過ぎて調査の域を超えることもあった。ある時、山東省出身の知人が、盗難の容疑者として地区の警察に捕まった。すぐに誤認逮捕であることはわかったのだが、取り調べ中に幾度も殴られ、帰宅した彼の顔は大きく腫れあがっていた。翌日、彼の友人と謝罪を要求するために派出所に向いた。また、当時、上海では臨時戸籍を保持していない農民工の身柄を拘束することが常態化していた。「五一村」の知人たちもよく拘束された。そのたびに、派出所に赴き、釈放を懇願した。このような対象者に接近する方法が科学的であるのかどうかは定かではないが、調査を進める上では、非常に有益であった。たとえ

ば、アンケート表の配布、ヒアリングの手配、「家計簿」の作成などを進んで手伝ってくれた。そして、調査を通して、「五一村」の農民工の、低賃金、低学歴、長時間労働などの実態が鮮明に浮かび上がった。まさに異臭が漂う「五一村」で、地を這いつくばるようにひたむきに生きる農民工とは、筆者の目には「人間らしい生活」とはほど遠い存在にしか映らなかった。

## 二 農民工の捉え方

筆者は、「五一村」で暮らす農民工たちの苦しみを五感で感じ、「同情」を抱いた。そして、それを表現せずにはいられなかった<sup>(1)</sup>。しかし、彼らの惨めな姿を羅列するだけでは論文を書くことはできない。解釈を加え、その背景を考察する必要がある。筆者は、次のような方法で農民工を捉えようとした。

まず、「なぜ、農民工は低賃金なのか？」と問えば、「彼らは農村出身者であるから」と答える。第二の問いとして、「なぜ、農村出身者は低賃金なのか？」と問えば、「戸籍制度の下で都市住民と農民とが峻別され、条件の良い仕事は都市住民のものであるから」。第三の問いとして、「なぜ、戸籍制度によって低賃金層を作り出す必要があるのか？（市場によって労働者の峻別に依存させればよいので

はないか）」と問えば、「戸籍制度は低賃金を作り出すだけではなく、無権利層をも作り出すからである」。第四の問いとして、「なぜ、無権利層が必要なのか？」と問えば、「無権利あるいは権利の多くを喪失した人びとの存在は経済発展には不可欠であり、さらに戸籍制度が存続される限り、無権利層は再生産され続けることになるから」。そして、第五の問いとして、「なぜ、農民工はそのような理不尽ともいえる状況を享受できるのか？」と問えば、「農民工は、農村で貧しく惨めな生活を余儀なくされていたから、それに比べれば都市でたとえ低賃金であろうとも我慢することができるから」と答えることができる。こうした重層的な問い掛けを繰り返し<sup>(2)</sup>、筆者は、農民工を構造的に捉えつつ、彼らの背後に潜む諸問題を鮮明とし、その上で、説得力のある解決策、または政策提言を示すことができる、と確信した。

このように「なぜ」と問うことは、科学的なアプローチの第一歩であることに間違いはない。しかし、初めから目的が存在していたとしたら、「なぜ」を繰り返す作業は、あたかも科学的のようだが、実は、目的を論証するための材料を探すための口実、裏付けを得るための作業になってしまう。

生江明<sup>(3)</sup>は、かつて発展途上国の調査団として活躍した経験から、海外調査の問題点を次のように鋭く指摘する。

「ぼくがいろんな国の調査をやっているときに、日本の研究者や調査をやっている人たちのやり方に、ある共通項があることに気が付いた。それは、私は、AとBとCとDの項目について、情報を知りたい。Aは何パーセント、Bは何パーセント、Cは何パーセントと集める。大きな土の塊のなかに、A、B、C、Dというシャベルというか、磁石のようなものをすつと入れて、それだけを取り出す。で、Aは何パーセント、Bは何パーセント、Cは何パーセント、がこの社会です。で、嘘じゃないけど、その他の要素はすべて無視する。つまり自分の知りたい要素だけ取り出してデジタルするともっともらしく見えるだけ。」それがどうしたの?」「それでこの社会分かったの?」。日本と比較した時はわかる。だけど、それが、相手の国を分かったことになるか、と言えば、「全然わかってない」。つまり、自分の欲しいものを最初に決めて、それだけ、引っこ抜くっていう調査があまりにも多くて……」[生江ほか2018:164]。

このような生江の指摘から農民工を対象とした調査・研究を振り返ると、農民工が中国の社会問題としてクローズアップされた時、すでに低賃金、低学歴、長時間労働、無権利層、最下層、棄民というレッテルを貼られ、農民工とは貧しく、惨めな存在であるというイメージは形成されていた。たとえ著名な研究者であったとしても、そのような先入観から逃れることはできなかつたのではなからうか。

事実、筆者も、農民工に「同情」を抱き、それをより強調するための事例を探し求めていた。生江に従えば、「同情」を助長するような「自分の知りたい要素だけ取り出してデジタル」し、「もっともらしく」論文を書き上げ、あたかも農民工の代弁者として、彼らの置かれた状況の改善を求め、その道筋を提示することが、その役割であると勝手に思い込んでいた。つまり、どんなに農民工に接近し、彼らと「対話」を繰り返しても、先入観、目的化された課題に何一つ疑いを抱かず、どっぷりと首まで浸っていたといえる。しかし、そのような状況において研究対象を正確に理解することは不可能であつた。

いうまでもなく、「同情」を抱いたことは筆者の「過ち」にほかならず、躓いた石は決して小さくなかつた。確かに前述したような無権利で、差別的な扱いを受け、まるで棄民のような存在である農民工に接すれば、「同情」を抱くことは至極当然のことである。「同じ人間としていかなものか?」という思いが心の底から込み上げてきても不思議ではない。ただし、「同情」を抱く背後には、富者と貧者あるいは強者と弱者などの対照的な構図が<sup>14</sup>潜み、当然、「同情」とは、富者、強者の視点にほかならない。そして、「同情」を抱くということは、インゲボルク・ノルトマンが指摘するように、「距離を破壊する」[アーレント2009:84]ものである。すなわち、「同じ人間としてい



かななものか？」という疑問の背後には、「農民工を、いかにして私と同じレベルの生活、労働条件に引き上げることができるのか?」、あるいは「農民工の幸福とは、筆者が日本で享受している生活、家電製品や自動車などの耐久消費財を所有し、毎日お風呂に入れるような生活水準を享受することである」という思い込みが潜んでいた。つまり、「同情」、より正確に言えば距離を縮めるという思考の背後には、「貧しい人びとは、豊かな生活を享受したいと願っている」という誰もが否定しがたい正当な目的が潜んでいるかのようなのである。そして、距離を縮めるために、または、筆者と農民工の間に広がる深い溝が生まれている要因を意識しながら、次のような「なぜ」を繰り返してみれば、大した思考をすることなく、実に容易な結論に辿り着くことになる。

すなわち、「なぜ、筆者（上海人も含め）と農民工は違うのか」と問えば、生得的な要因を除けば、その違いの一つに「学歴」を挙げることができよう。そして、「彼らは低学歴ゆえに、低賃金の仕事しかできない」と答え、その上、「なぜ、彼らは低学歴なのか?」と問いを重ねれば、「農村の教育環境が未整備のため」という両者の距離を晒すことができる。実際、一九九七年に発表した論文で次のような結論を導き出した。「オートバイでタクシートの仕事をしている人々やリヤカー付自転車運搬の仕事をしてい

る人々にヒアリングを行ってみると、彼らは上海に出稼ぎに来るようになって、初めて教育の重要性に気付かされ、せめて自分の子供には高い教育を受けさせ、自分とは違った人生を歩ませてやりたいと願っている。休みもなく毎日、朝早くから夜遅くまでするような仕事を子供にはさせたくないと思ってしまうようになってきているということである。そして、彼らは、もし自分の子供に少しでも高い教育を受けさせることができるような条件を整えば、身を粉にしても、現在の仕事を続けて、自らは上海の最下層に組み込まれながらも、子供に大きな希望を託す生き方をしていくのではないかと思われる」〔原田1997a:56〕。そして、その解決策として、農村の教育環境の充実を早急に実施すること、または、都市で農民工が技術や技能を学べる学校を建設することなどの解決策を頭のなかで描いたことはいうまでもない。しかし、この「なぜ」の繰り返し、問題を発見する前提には、教育こそが「豊かさへの解決策」であるという一つの刷り込みが含まれている。言い換えれば、「低学歴≡低賃金」という構図に支配された押し問答とは、「教育こそが何より重要」という結論ありきの問いに過ぎない。また、低学歴な農民工を利用して、教育の研究者でもないのに、その重要性を語っただけである。そして、「同情」という情念に支えられて発表した諸論文は、農民工たちに嘯われる程度の内容でしかない。

筆者が犯した過ちとは、いうまでもなく、先入観に捕われていたからである。さらに、先進国の経験を生かせば、あるいは同じような方法を実施すれば、容易く追いつくことができるだろうと思ひ込んだことである。さらに、農民工たちに不足していた「教育」、さらにいえば、日本と同じような「人づくり」を行えば、「人間らしい生活」を彼らも手にすることができるようという過信にほかならない。

ただし、このような先入観の背後には、農民工を「浮遊した群衆」として捉え続けていた筆者の「思い込み」を見逃すわけにはいかない。すなわち、筆者は、初めから農民工を「浮遊した群衆」として、孤立した状態の下で、「資本」に蹂躪される一人の人間として捉え、彼らが依拠する地縁・血縁者との関係性をその視野に入れることはなかった。無論、彼らが、故郷から都市へ移動する時、都市で仕事や部屋を探す時、さらに、日々の生活において互いに助け合う姿を知らないわけではなかった。そればかりか、筆者の調査とは、前述したように彼らの地縁・血縁者のネットワークに深く依存していた。しかし、実際の筆者の視線は、地縁・血縁者のネットワークを無視するように「孤立した人びと」だけに注がれていたといえよう。とくに、次節で述べる「五一村」で遭遇した「新しい運動」を目のあたりにして、地縁・血縁者のネットワークへの関心はますます薄れていくことになった。

### 三 農民工の「新しい運動」

「新しい運動」とは、一九九〇年代半ばを過ぎた頃、「五一村」において、農民工が自らの手で、農民工を対象とした労働斡旋所、診療所、農民工の子弟のための学校（民工子弟学校）を作り始めたという「新しい動き」を指す。周知のように、当時の上海では、戸籍制度の下、農民工は、労働・生活面において都市住民と比べ明らかに区別された存在であった。たとえば、求人広告には、「上海戸籍を持つ者だけが対象である」という就業条件が記載されていた。また、病院に行けば、高額な治療費を請求され、さらに、故郷から子どもを呼び寄せても、上海の学校に入学することは非常に難しかった。なかでも学校に拒絶されたことは、子どもたちに深刻な影響を与えていた。「五一村」では、小学校に通えず路上で遊ぶ子どもたちが目立ち始め、故郷に子どもたちを置いてきた農民工は、「子どもたちと離れ離れに生活するのは辛い」という悲痛な声をあげていた。まさに、当時の状況とは、ハンナ・アレントの言葉、「私たちが一緒に食事をとるたびに自由は食席に招かれている。椅子はあいたままだが席はもうけてある」「アレント 1994:3」に従えば、都市にやってきた農民工は、都市住民から食事に招かれることもなく、彼らには椅子ひと



つ用意されていなかった。ただ、政府に守られた一つの聖域というべき都市住民の食卓を後ろから黙って眺めることしかできなかった。

ところが、農民工は、とりわけ自らの椅子と食卓がないことを嘆き続けることはなく、政府に文句をいうわけではなかった。ただ、彼らは、地縁・血縁者のネットワークでは解決できない公共性の高い、言い換えれば、出身地に関係なく誰もが共に食事を楽しむことができる椅子と食卓を勝手に作り始めた。

無論、「五一村」に新たに生まれた諸施設は、都市政府の援助を受けたわけではなく、また、農民工の故郷の政府が援助を与えていたわけではない。たまたま「五一村」に住んでいたエネルギーに満ち溢れた農民工の手によって作られた。そして、それら施設は、都市社会でもなく、農村社会でもない、「新しい社会」の象徴的存在でもあり、「新しい社会」を作り出す農民工は、筆者に大きなインパクトを与え、劣悪な環境の下で、農民工自身が成し遂げたことに感動すら覚えた。いうまでもなく、心揺さぶられた理由とは、このような「新しい運動」とは、農民工の権利主張にほかならず、理不尽ともいえる戸籍制度を形骸化する動きが社会の根底から始まった、という思いを禁じえなかったからである。さらに、この「新しさ」によって、農民工は、彼らが作り出した諸施設を土台として、地縁・血縁者

のネットワークから離脱し、新たな人間関係が生まれるのではないか。同時に、自らの手で、新たな身分を勝ち取り、彼らの権利を主張していく場が形成されるのではないかと期待を寄せた。とくに、当時の筆者は、人間の「進歩」、あるいは、その無限の可能性をどこかで信じ、「五一村」で発見した農民工自身の手によって公的な空間を作り出す彼らこそ、「市民」の名はふさわしいのではないかと捉え始めていた。

もつとも、中国社会に、新しい息吹を持ち望んでいたのは筆者だけではない。たとえば、上原一慶は、「中国の行方は、「社会主義」を標榜する国家が、市場経済化の過程で容認された失業や、非正規就業の増大、そこから生まれた諸矛盾などの社会の不安定要因をいかに解決していくかによっている」といつても過言ではないであろう。「上原2009:1X」とした上で、「党からも自立した労働者の組織が不可欠であろう。中国の未来は、この点にかかっている」[上原2009:302]と「新しさ」への期待を語っている。いうまでもなく、この上原の期待の背後には、「中国の行方」を託した所在は明確となり、既存の「社会主義国家」への期待とは裏腹な希望を読み取ることができよう。もつとも、上原は、「五一村」における「新しい運動」を自身の研究に取り上げたわけではない。しかし、上海の片隅から忽然と姿を現した「新しい運動」とは、中国の都市

社会、農村社会とは異なる、または、社会主義国家においてそれまで存在していなかった「新しい社会」が創出されるのではないかという期待が膨らむようでもあった。

ところが、この「新しい社会」とは、政府からも認められた存在ではなく、たえず破壊と背中合わせの危険な状況に置かれていた。実際、「五一村」及びその周辺には、一九九七年当時、七つの民工子弟学校が生まれたが、その多くは開設後まもなく潰され、また、二か所あった診療所も閉鎖に追い込まれ、「五一村」の「新しさ」は徐々に先細りとなり、二〇〇〇年代初頭には「新しさ」はほぼ消滅した。そして、筆者には絶望感だけが残った。

しかし、このような事実とは、「市場経済」に抵抗する人間の姿、あるいは人間の「進歩」やその可能性を信じる者、言い換えれば、「自分のみたい現実」が目の前から消えていっただけに過ぎなかった。少なくとも筆者にとつて、「新しい運動」とは、人間の「進歩」であるとか、そこに無限の可能性を抱くことへの猛烈な反省を促す以外何もでもなかった。そして、過度の期待が過ぎ去った後、筆者の前には、「新しい社会」が生まれる前と変わらぬ、地縁・血縁者のネットワークに依存しながら生きる農民工の姿が浮かび上がった。少なくとも「新しい社会」を作り出そうとした農民工の動機とは、自発的な精神、社会をよりよくしたいという精神に支えられていたわけではな

い。それらは、不足するサービスを提供し、利潤を追求する組織、なかでも地縁・血縁者を核とした組織によって、人びとの欲望、具体的にいえば「新たなサービスを提供しお金を儲けたい」という実に単純な欲望によって支えられたものであった。ただし、その動機が単純なものであったとしても地縁・血縁者のネットワークが、学校や診療所などを生み出した事実とは、前述したように都市への移動、都市における仕事や部屋を探すといった相互扶助としての役割だけではなく、ネットワークに内包された経済的機能を浮かび上がらせることになった。ただし、筆者には、地縁・血縁者のネットワークによる経済活動を前にして、次のような疑問が浮かび上がった。

学校などの施設を作ることとは、そもそも政府に認められていたわけではない。何故、後ろ盾を持たずに経済活動を営むことができたのか。また、学校などの施設が取り壊される危険は充分予測できたはずである。何故、短命であることを知りながら、それら施設を作ったのだろうか。

「低学歴」、「無教養」という農民工の資質にその答えを求めることができるのだろうか。あるいは、制度の未整備、なかでも戸籍制度の改善を怠る政府の責任にその答えを求めることができるのだろうか。いうまでもなく、前者の回答は論外であるが、後者も、正論といえるが、筆者の問いに何一つ答えていない。もちろん、筆者の問い掛けと

は、中国経済をマクロ的な視点からみれば、取るに足らない小さな出来事である。しかし、筆者は、この問いの先に、中国経済の特殊性を知る上で重要なヒントが隠されていると考えている。

#### 四 「擬制」という概念

筆者が、「五一村」で目撃した学校などの施設は、前述したように「公共性」が高く、この点に焦点をあてれば評価すべきものである。しかし、「公共性」とは、どこまでも筆者を含め部外者によって見出される概念にほかならない。それゆえ、この概念を外して、学校などの施設について再考する必要がある。ここでは、そのための補助線として、筆者が実際に体験した二つの事例を紹介したい。

##### 事例1 一本の丸太

二〇〇五年九月、まだ暑さが残る河南省南陽市から骨董品の偽物づくりで有名な石仏寺へタクシーで移動していた。舗装されているが、決して高速道路とはいえない道をしばらく走っていると、前方に料金所が目に入る。するとタクシーの運転手は、何もいわず、ハンドルを右に切り、舗装されていないガタガタ道へと自動車を進めた。料金所をわざわざ避けることは地元の運転手であれば当然の行為である。もちろん、横道にそれたばかりに走行距離が延

び、それに伴い料金も多少高くなる。しかし、分かっているても文句はいわず、そのまま乗車していると、タクシーはある集落のなかに入ってしまった。集落に入るとすぐに、フロントガラス越しに一本の丸太がスルスルと降りてきて、タクシーの行く手を塞いだ。そして、タクシーが停まると、一人の老いた農夫が近づいてきた。明らかに地元農民そのものの身なりである。運転手も心得たもので、すぐに窓を開け、その老人に一元を手渡す。老人が丸太を引き上げる間に、運転手は、振り向きながら「ここを通ると九元も得なんだ」と得意げに笑った。

##### 事例2 バスと小椅子

二〇〇二年八月、江西省鷹潭市で、景德鎮行きバスのチケットを購入するためバスセンターに入ろうとすると、四〇代後半のオヤジに呼び止められた。真黒に日焼けした男は、白い歯を見せながら、「チケットならあるよ。どこへ行くの？ 安いよ」と。どこからみても怪しいオヤジである。しばらくオヤジはしつこくまとわりついてきたが、私が窓口に並ぶと、あきらめたのか、それとも次のカモになりそうな誰かを見つけたのか、知らぬ間に消えていた。何の問題もなく私は景德鎮行きのチケットを正規の値段で購入した。そして、バスは、三〇分ほど後に出発した。ところが、バスがバスセンターを後にし、一つ目の角を回ったところで、急停車し、ドアが開いた。すると、あの日焼

けたオヤジを先頭にして、バタバタと六人の若い女性が次から次に乗り込んできた。客席は、ほぼ満席状態であった。ところが、運転手は、どこからか小さなプラスチック製の椅子（日本人がよく風呂場で使うようなイスである）を取り出し、女性たちに配りだした。そして、彼女たちは、通路に縦一列に等間隔に並び、その椅子に座った。そして例のオヤジは、ポケットから札束を運転手に手渡すと、そそくさとバスから降りて行った。

以上二つの事例に登場する「農夫」、「オヤジと運転手」に、実際に遭遇したならば、多くの人びとは（とくに日本人であれば）、法を犯しているかどうかに関係なく、彼の行為を、「人の道に外れたもの」として強い嫌悪感を抱くのではないだろうか。自動車の行く手を突然塞がれ、その上「通行料」を請求されたら、または、料金を払っていないにもかかわらず通路に座らされたら、怒り心頭ではないだろうか。つまり、彼らの行為は、道徳的に認められず、あるいは恥ずべき行為と捉えられるであろう。

何故、道徳的に許せないのだろうか。筆者は、その背後に、「私的所有」という一つの概念が横たわっていると考えている。すなわち、「農夫」は誰のものでもない「土地」を、「オヤジと運転手」は会社のバスを、勝手に使い、あるいはそれらを利用する根拠（権利）を持たない者

が「お金儲けをしている」ことに嫌悪感を抱き、腹立たしきを感じているのではなからうか。逆説的にいえば、腹立たしく感じることは、「私的所有」の概念が骨の髄まで浸透している一つの証でもある。

そして、このように「嫌悪感」を抱くことは、ポランニーの次のような指摘と同根でもある。すなわち、「自身の自由意思にもとづいて——たとえば一二時間、一四時間あるいは一六時間というふうに——切り売りし、利潤を得ることができると考えさせるものなのだ」（ポランニー 2015: 402）。いうまでもなく、このような指摘の背後には、ポランニーが批判を繰り返した「経済決定論」が潜む。すなわち、「経済的」人間が「本来的」人間であるごとく、経済システムこそが「本来的」な社会なのだ、という誤った結論に至るのは、避けようもないことでした。「ポランニー 2015: 45」。確かに、ポランニーがいうように、「経済的人間」||「本来的人間」、「経済システム」||「本来的な社会」とする構図、つまり「経済決定論」は、人間を幸せな未来へと導くことはなく、人間や社会のすべてを捉え切ることとはできないだろう。しかし、多くの人びとは、「農夫」、「オヤジと運転手」に嫌悪感を抱くであろうし、「一二時間、一四時間あるいは一六時間」を切り売りすることによってしか収入を手にすることができず、その上、その収入の多寡があたかも人間の価値を定めるとい

「経済決定論」に基づく考え方に、強く影響を受けていることも事実である。

ただし、ポランニーが危惧する「経済決定論」とは、「私的所有」に基づく「市場経済」を前提にしている点に留意する必要がある。言い換えれば、ポランニーがいう「経済的人間」、「経済システム」とは、「私的所有」に基づく「市場経済」を前提とするものである。

それゆえ、「農夫」たちの行為を「私的所有」という概念を取り除き読み解けば、まるで異次元に生きる「経済的人間」、そして「経済システム」を見出すことのできるであろう。筆者は、彼らの行為の特徴として、主に次のような点を指摘したい。

第一に、「農夫」、「オヤジと運転手」は、自らの行為が地元の政府やバス会社から罰せられる危険を、その背中に感じているかもしれないが、彼らの態度に、背徳感を感じ取ることはできない。彼らは、悪びれる様子もなく、むしろ堂々と、丸太を操り、声を掛けている。その理由は、いうまでもなく、「農夫」であれば、村の中を走る道路を、また、「オヤジと運転手」は、車内の通路を、自分たちの所有物だと認識しているからである。無論、法的な根拠があるわけではなく、それらは彼らの所有物ではない。ただ、彼らは、勝手に自分が所有していると思ひ込んでいるに過ぎない。つまり、彼らの経済活動は、「私的所有」で

はなく、どこまでも「思い込み」という「擬制」、すなわちフィクションとしての「私的所有・領域」に依拠したものであり、彼らはそこに自らの行為に対する正当性を見出しているだけである。

第二に、彼らが背徳感を抱かない、または、正当性を見出す背景には、他者から直接後ろ指をさされることのない点も影響しているであろう。少なくとも、タクシーの運転手も、通路に座らされた若い女性たちも、怒り出す者は誰一人いなかった。もちろん、他者が、彼らの行為をどのように捉えているかどうかは定かではない。嫌悪感を抱く者もいるであろうし、何も感じない者もいるだろう。しかし、彼らに対する評価には関係なく、他者は、「擬制的私的所有・領域」に基づく「市場」を認めている。つまり、逆説に言えば、「農夫」や「オヤジと運転手」とは、「擬制的私的所有・領域」に依拠しながら、一つの「市場」を生み出しているといえる。

以上、二つの事例から、「擬制」という概念およびそれに依拠しながら生み出される「市場」についてみてきたが、筆者が、「五一村」で目撃した「新しい運動」と「農夫」や「オヤジと運転手」の経済活動を比べると、何処に違いが存在するのであるのか。いうまでもなく、前者には、前述したように高い「公共性」が生み出され、評価すべき対象に映る。しかし、「公共性」を剥ぎとれば、労働



幹旋所、診療所、学校の経営者と「農夫」や「オヤジと運転手」とに大きな違いを見出すことはできない。いずれの経済活動も、法的な後ろ盾があるわけではなく、その上、実際に経済活動を行う場所も、誰のものであるということに気がしているわけではない。言い換えれば、欲望のおもむくままに「擬制的私的所有・領域」に依拠しながら、「市場」を生み出し、「お金儲け」をしているに過ぎない。

ただし、「擬制」という概念から、筆者が「五一村」で遭遇した農民工を再考すれば、主に次のような点が指摘できる。

第一に、「擬制」という概念から「五一村」で経済活動を営む農民工の姿を捉え直せば、オートバイ・タクシール業、廃品回収業、生鮮食料品（主に野菜や果物）の販売業、家電・自転車・バイクなどの修理業など、道路やクレークの土手などを勝手に占有し、生計を立てる多くの農民工が存在していた。まさに労働幹旋所、診療所、民工子弟学校だけではなく、「五一村」の至る所で、「擬制的私的所有・領域」に基づく「市場」が次から次へと誕生していたといえよう。つまり、筆者が、「五一村」で遭遇した農民工とは、荒れ狂う「市場」のなかで、すなわち、「悪魔の挽き臼」によって、摺り潰されていたわけではない。あるいは、彼らは、相互扶助が約束された地縁・血縁者のネットワークのなかで息を潜めて「悪魔の挽き臼」から逃

れていたわけではない。むしろ農民工とは、地縁・血縁者と協力しながら、「市場」を生み出すことによって、「悪魔の挽き臼」に抵抗していたといえよう。

第二に、何故、「五一村」の農民工は、さらに「農夫」や「オヤジと運転手」も含め、「擬制」という概念に依拠することができるのであろうか。筆者は、その背後にとりわけ複雑な要因があるのではなく、ただ、彼らは、中国経済・社会の奥底に潜む「包」の秩序、すなわち、ハイエクがいうところの「自生的秩序」に従っていたと推測している。「包」とは、周知のように柏祐賢や加藤弘之によって中国経済を読み解く上で、重要なキーワードとして位置付けられているが、筆者は、「包」の秩序を理解する上で、あるいは、この秩序が生まれる前提として、「擬制」という概念が不可欠であると考えている。無論、ここでは紙幅の関係上、その詳細は別稿に譲らなければならないが、筆者は、「包」とは、人びとが「擬制的私的所有・領域」に依拠しながらも、「包」的な関係、すなわち、日本語でいうならば、「請負い」の関係を結びながら営まれた経済活動であると捉えている。つまり、「五一村」で筆者が遭遇した地縁・血縁者のネットワークを核とした経済活動とは、「包」的な経済活動であったといえる。

第三に、もともと、「包」の構造から農民工たちの経済活動、たとえば、労働幹旋所、診療所、民工子弟学校、



オートバイ・タクシー業、廃品回収業、生鮮食料品（主に野菜や果物）の販売業などを捉えれば、必ずしも完全なる「包」とはいえない。それは、どこまでも未完な「包」の構造である。そもそも「包」とは、「出包者」と「承包者」、すなわち「請負い」の「出し手」と「受け手」が存在して、初めて成立する秩序である。しかし、彼らの「包」の構造には、「出包者」が存在していない。それゆえ、それら経済活動は、たえず破壊の対象となり、短命であることを余儀なくされていた。ただし、逆説的にいえば、「出包者」とそれら組織が結び付けば、そこには「包」の構造が生まれ、破壊の運命から逃れることができた。実際、民工子弟学校のなかには、政府と「包」の関係を結び、その後も農民工の手で運営され、また、生鮮食料品（主に野菜や果物）の販売業も、卸市場や小売市場と「包」の関係を結びながら、存続しているケースも少なくない。

第四に、民工子弟学校のように政府と「包」の関係が結ばれ、その経済活動を継続できるかどうか、それはあくまで結果論である。言い換えれば、「出包者」が不在であれば、その経済活動は、短命に終わってしまうであろうが、どこかで「出包者」と結びつくことができれば、その経済活動が、道徳的に認められなくても、または、法的に問題があったとしても、それを継続することができるであろう。実際、前述した民工子弟学校の多くも、設立当初は、

「偽物」が存在していた。事実、筆者が知る限り、当時、教員免許を持つている教員など誰一人として存在していない学校も少なくなかった。また、中国経済全体をみれば、「偽物」といわれ市場から駆逐されていた商品が、知らぬ間に、市場で多くのシェアを獲得していたという話はいくつか聞く話でもある。

第五に、「擬制的私的所有・領域」の概念についての理解を深める上で、未完の「包」の構造を軽視することはできない。実際、現実社会に目を向ければ、この「擬制」という概念に従い、多くの人びとが、日々の糧を手に行っていることは事実である。もちろん、筆者が「五一村」で目撃した農民工、または、「農夫」や「オヤジと運転手」の経済活動とは、あくまで中国における「市場」の片隅の出来事に過ぎない。しかし、彼らのように「擬制」という概念に基づき経済活動を営む人びとが無数に存在していることも事実である。言い換えれば、それが短命であろうとも、法的に認められず「偽物」という誹りを受けようとも、中国では、「擬制」の概念に基づき「市場」が日々生まれ、それが中国経済の成長を支える一つの要因を形成していることは間違いないであろう。

以上、筆者が一九九〇年代半ば過ぎから二〇〇〇年代初頭にかけて、「五一村」で垣間見た、農民工が、地縁・血縁者のネットワークを核としながら、「擬制的私的所有・

領域」に基づき「市場」を生み出していた実態である。と同時に、この実態とは、「擬制」という概念、さらに「擬制」という概念に基づく「包」の秩序の存在を知り、または、中国経済の特殊性の理解を深めるために、重要な示唆を与えてくれる有益な情報源であったといえよう。

## おわりに

農民工は、「悪魔の挽き臼」によって、「浮遊した群衆」へと転換したのか。確かに、一人ひとりの農民工に焦点をあて、その上、筆者の生活と比較すれば、彼らは、「資本の餌食」にされ、「悲惨極まりない地獄のような世界」での生活を余儀なくされているかのように映る。それゆえ、農民工に同情を抱き、彼らを劣悪な環境に貶めている元凶ともいえる戸籍制度の改革を唱えることも理解できないわけではない。しかし、筆者は、批判的精神もなく先進国の経験を一義的とし、そこから農民工を、さらに中国経済を捉えることに対しては懐疑的である。

本論では、まず、この先進国の経験を払拭する意味も込め、ポランニーの「悪魔の挽き臼」を一つの導き手として、自省的に農民工を捉え直すことから始めた。そして、都市の片隅で、農民工は、地縁・血縁者のネットワークという一つの社会的関係に依存した状態を保ち続け、市場経

済の浸透によって、「浮遊した群衆」へ摺り潰されてしまったわけではない、という事実を明らかにした。しかし、地縁・血縁者のネットワークの存在、さらに相互扶助だけではなく、そのネットワークを核として経済活動も行っているという事実から、ポランニーがいう「経済が社会的諸関係の中に埋め込まれているのではなく、反対に社会的諸関係が経済システムの中に埋め込まれている」という状況を論証しているわけではない。むしろ地縁・血縁者のネットワークの存在を強調したとしても、そのような市場経済は「遅れている」だけだと一蹴されてしまうであろう。その上、「遅れ」が強調されれば、ポランニーがいうような「大転換」は、中国ではまだ生じていないという見解が示され、中国の前近代性がより際立つとともに、この先に起こり得る悲劇、「悪魔の挽き臼」によってすり潰されるのは、「これから」、あるいは「現在進行中」という批判に正当性を与えることになるだろう。つまり、どれだけ地縁・血縁者のネットワークを強調したとしても、そこに大きな意義が見出されることはないだろう。

しかし、地縁・血縁者のネットワークが、「擬制的私的所有・領域」に基づき新たな「市場」を創出している事実、逆説的にいえば、農民工が、見も知らぬ土地に流入し、そこで「自生的秩序」としての「包」（もちろん、彼

らの「包」は未完の構造であることが多いが）を選択していた事実を加味すれば、「経済が社会に埋め込まれたままである」という一つの結論を下すことが可能であろう。さらに、「擬制」という概念に基づく「包」の秩序とは、先進諸国の経済システムとは大きく異なる点であり、そこに中国経済の特殊性を見出すことができるといえよう。

無論、このような「擬制」という概念の発見は、筆者にとって、〃はじまり〃を意味するに過ぎない。この「擬制」という概念でどこまで中国経済を読み解くことができるかは、未知数であるが、今後は、中国社会のさまざまな場所で経済活動を営む人びとの視線に立ち、「擬制」、それに基づく「包」の秩序の解明に力を注いでいきたい。

## 注

〈1〉 Karl Polanyiの姓の日本語表記は「ポランニー」または「ポラニー」と二通りがあるが、本論では、玉野井芳郎に従い「ポランニー」とする【ポランニー 1980a: 10】。

〈2〉 筆者の農民工調査は主に上海市で行っていたが、一九九九年三月、深圳市や広州市の日系企業の工場見学をする機会を得た。そこで、筆者が目撃したのは、広い工場なかで、農民工の女性たちが働く姿であった。なかでも印象深いのは、数百人の女性たち、それも十代半ばの若い女性

たちが、黄色いユニフォームを身に纏い、机に座りひたすら配線をハンダで接着する作業を見学した時である。日系企業ということもあり、工場内は清潔に保たれていたが、就業時間内ではほぼ同じ作業を延々と続ける彼女たちを眺めていると、工場というよりも、むしろ鶏舎小屋に迷い込んだような錯覚に陥った。工場の責任者（日本人）から、「彼女たちは、故郷へ仕送りをするため必死で働いている」と説明を受けたが、同世代の日本人の若い女性たちの日常を思い起すと、暗澹たる気分が襲われた。

〈3〉 一九九〇年代の上海市における農民工の実態を紹介した論文として、拙稿【1994, 1997a, 1997b, 1998】がある。

〈4〉 「五一村」は、金沙江路を郊外に向かい、真北路を過ぎたあたりに位置していた。当時、上海では都市と農村が隣接する場所に多くの「農民工集中居住地区」が形成されていたといわれるが、「五一村」のように農民工が集中して生活する空間が上海市にどのくらい存在していたのかは定かではない。ただ、王午鼎編【1995: 368】によれば、一九九四年末、上海市には「農民工集中居住地区」に創設されていた「外来人口治安管理服务隊」が三七四隊あったとしている（二七一一人が従事していたとされている）。この数字から判断して上海市には、「五一村」のような「農民工集中居住地区」が多数存在していたと推測できる。

〈5〉 これらの数値は地元農民などに対するヒアリングによって得られた情報に基づく。

〈6〉 当時のヒアリング調査によれば、地元農民が貸し出す

部屋数は一〜二部屋が大半を占めていた。しかし、農民工の増加に伴い、軒先や庭に小屋のような簡易住宅を新築するケースも目立った。

〈7〉一九九〇年代の上海では、農村出身者を「農民工」と呼ぶことは少なく、「外の地からやって来た人びと」、つまり「地元上海の人ではない」という意味を込め、「外地人」と呼ぶことが多かった。

〈8〉部屋の面積はさまざまであるが一〇〜二〇平方メートル程度の広さが大半を占めていた。部屋は、ベッドと食卓が置かれただけで実に殺風景であった。

〈9〉この事件の詳細については、「日中友好新聞」（一九九七年一月五日号）に掲載。

〈10〉当時の上海市では、農民工に対して毎月臨時戸籍の登録および登録費（一五元）の支払が義務づけられていた。登録費として取められた費用は、主に「外来人口治安管理服务隊」の給与や奨励金にあてられていた。そして、「外来人口治安管理服务隊」が夜な夜な見回りをして、臨時戸籍を登録していない農民工を捕らえ、一〜二日間程度、留置所に拘束し、時には、留置所から、電車などで上海市から別の都市へ強制送還することが行われていた。上海市では、一九九一年一月九日、上海市第九回人民代表大会常務委員会において「上海市收容遣送管理条例」が定められていた（条例の詳細は、王午鼎編『1995:56-57』参照）。なお、臨時戸籍に対する民工の意識を当時実施したアンケート結果からみると「原田 2009」、主に次の二点を

指摘することができる。第一点、「臨時戸籍の登録やその費用を毎月取めるとき、屈辱感を感じるか」という問いに対して、四三人（三六・四％）は「はい」とし、五二人（四四・一％）が「いいえ」と回答していた。また、「上海人から差別されて嫌な思いをしているか」という問いに対して、五〇人（四二・四％）が「はい」と回答していた。このように半数以上の人々は、屈辱感や差別をそれほど気にしていたわけではなかったといえる。第二点、「臨時戸籍の登録費を支払っていないと不安を感じるか」という問いに対して、五六人（四七・五％）が「はい」と回答していた。臨時戸籍を登録していないがために何か事件に巻き込まれ犯人扱いされたり、または、警察官に尋問を受け多額な罰金を要求されたりするのではないかという不安は小さくなかったようだが、半数以上の人々は不安を強く感じていたわけではない。その背景には、地縁・血縁ネットワークの存在、すなわち「もし、何かあったとしても、地縁・血縁者のもとに行けば、大丈夫」という逃げ場所の存在が影響していたと推測される。言い換えれば、臨時戸籍の登録のような理不尽な脅しとは、逃げ場を有する農民工には大きな効力を発揮することは難しかったといえよう。

〈11〉筆者が感じた「同情」を理解し、それを原動力として論文を書くべきであると背中を押したのは、加藤弘之だった。もちろん、加藤の激励の真意を筆者が正確に掴み取っていたかは定かではないが、一九九〇年代後半、上海市のいくつかの「農民工集中居住区」や民工子弟学校を案内し

た折、加藤も農民工の実態を目の当たりにして、「同情」を抱いたのかもしれない。もちろん、たとえ加藤が農民工に対して「同情」を抱いたとしても、とりわけそれに固辞することはなく、彼の研究スタイルは、周知のようにそのような細部に拘ることはなく、中国経済を俯瞰し続けたといえる。しかし、筆者は、「同情」に執着するものの、実際の農民工から感じる自由奔放な逞しさとギャップに苦悩することになる。「同情」を表現していく意味を見失ない、なかなか筆が進まなくなったことも事実である。そして、「同情」の先ではなく、彼らが享受する「自由」の先に描くべき中国が存在することに気付くまで五年の歳月を必要とした。

〈12〉筆者が、このように「なぜ」を繰り返しながら思考することは、トヨタによる「人づくり」の影響下に置かれていたことを如実に物語る。周知のように「五回のなぜ」とは、トヨタ生産方式の生みの親である大野耐一に由来する。大野は、トヨタ生産方式は、トヨタマンの五回の「なぜ」を繰り返す、科学的接近の態度の累積と展開によって作り上げられてきたとし、「ムダというものはいつた、なぜ発生するのか」の間を一つ発することによって、それこそ企業存続の条件である利益の意味を問うことにもなるし、ひいては人間の働きがいの本質についても自問自答することに「なる」とする[大野 1978:34]。大野がいうように、「なぜ」と問い掛けることは、研究者の「働きがい」でもあることを否定することは難しいだろう。いうまでも

なく研究者とは「なぜ」と問わずにはいられない生き物でもある。しかし、トヨタ生産方式の「なぜ」の繰り返しは、科学的接近であるかどうかは留意する必要がある。なぜならば、「五回のなぜ」には、あらかじめ「ムダの排除」、すなわち生産性、利益の向上という目的を有しているからである。しかし、初めから目的が存在していたとしたら、「なぜ」を繰り返す作業は、あたかも科学的のようだが、実は、目的を論証するための材料を探すための口実、裏付けを得るための作業になってしまふ。あるいは、「目的」というものは、それが正当化する手段に関係づけられること以外には、定義できないものだからである」というアーレントの指摘に、トヨタの「五回のなぜ」の科学的側面は耐えうることはできない[アーレント 2009:291]。また、猿田は、「五回の「なぜ」の繰り返し」が科学的接近の正しい態度として企業によって強制された場合には、労働者の意識を企業ないし職場に縛りつける手段となりうることは容易に想像しうる」とした上で、「五回の「なぜ」の繰り返し」は、「むしろ「毎日毎日、長時間・高密度・不規則労働を続けていながら、なぜ生活が豊かにならないのか」という点に、今こそ向けられるべきではなからうか」と根本的な疑問を呈する[猿田 1995:50-51]。ところが、二一世紀の今日においても、「なぜ」の繰り返し、自らの存在に向けられることはなかなかない。むしろ「なぜ」という疑問は、工場から染み出し、社会や家庭内で、「科学的接近の正しい態度」として半ば強制されてい

るのではないだろうか。あるいは、強制というよりも、「なぜ」という問い掛けを自らの存在意義に向けたいように設計されてしまっていると捉えた方がより現実に近いといえよう。

〈13〉 生江明は日本福祉大学の元同僚。筆者の論文へのアドバイスだけではなく、スターリング大学（スコットランド）で開催された「日英セミナー」において「The Bao Theory as the Safety Net for you the Socially Vulnerable Multitudes in China」を発表する機会（二〇一〇年）を与えていただき、また、汪希望〔2012〕の監修、鼎談「生江ほか2017,2018」などをもに行った。

〈14〉 このように農民工を弱者として捉えたのは決して筆者だけではない。たとえば、阿古智子もその著作のタイトル『貧者を喰らう国—中国格差社会からの警告』において、自らの立ち位置を明確に示しているといえよう。

〈15〉 このほかの事例としては、原田〔2013〕に詳しい。

〈16〉 柏祐賢〔1986〕は、この違いを次のように語っている。「ヨーロッパの法は、人の履み行すべき道の下の限界を示しているものであるのに対し、中国の法は、むしろ人の履み行すべき道の上の限界を示している」と（ここでいうところの法とは、規範、モラルといったほうが、より正確であろう）。つまり、中国では、「道の上」を越えなければ、国が定めた法を踏み外しても問題にはならないということである。

〈17〉 ハイエクの「自生的秩序」と「包」の秩序の問題につ

いては別稿ですでに詳細に論じている〔原田2020〕。  
〈18〉 柏祐賢と加藤弘之の「包」論は別稿で詳しく論じている〔原田2014,2017,2019〕。

## 参考文献

- 阿古智子 2014 『貧者を喰らう国——中国格差社会からの警告』新潮選書
- ハンナ・アーレント 1994 『過去と未来の間——政治思想への八試論』引田隆也・齋藤純一訳、みすず書房
- ハンナ・アーレント 2005 『暗い時代の人々』阿部齊訳、ちくま文芸文庫
- ハンナ・アーレント 2009 『暗い時代の人間性について』仲正昌樹訳、状況出版
- 上原一慶 2009 『民衆にとつての社会主義——失業問題からみた中国の過去、現在、そして行方』青木書店
- 汪希望 2012 『中国民工学校外史——現役校長が語る民工学校の過去・現在・未来』監修原田忠直・生江明、日本福祉大学研究紀要『現代と文化』第一二五号、日本福祉大学福祉社会開発研究所
- 王午鼎編 1995 『九〇年代上海流動人口』華東師範大学出版社
- 大野耐一 1978 『トヨタ生産方式——脱規模の経営をめざして』ダイヤモンド社
- 柏祐賢 1986 『経済秩序個性論Ⅱ』（柏祐賢著作集第四巻）



京都産業大学出版会

猿田正機 1995 『トヨタシステムと労務管理』税務経理協会

猿田正機 2017 『トヨタ研究からみえてくる福祉国家スウェーデンの社会政策』ミネルヴァ書房

マルタン・ナド 1997 『ある出稼石工の回想』喜安朗訳、岩波文庫

生江明・川村潤子・原田忠直 2017 「鼎談」蜷川幸雄のメモから読み解く現代社会——仮面とお面の間に存在するもの——日本福祉大学研究紀要『現代と文化』第一三六号、日本福祉大学福祉社会開発研究所

生江明・川村潤子・原田忠直 2018 「続鼎談」蜷川幸雄のメモから読み解く現代社会』『日本福祉大学経済論集』第五七号、日本福祉大学経済学会

F・A・ハイエク 2008 『隷属への道』西山千秋訳、春秋社

F・A・ハイエク 2017a 『自由の条件Ⅰ——自由の価値』気賀健三・古賀勝次郎訳、春秋社

F・A・ハイエク 2017b 『自由の条件Ⅱ——自由と法』気賀健三・古賀勝次郎訳、春秋社

F・A・ハイエク 2017c 『自由の条件Ⅲ——福祉国家における自由』気賀健三・古賀勝次郎訳、春秋社

原田忠直 1994 「上海市における出稼ぎ労働者の実態」『中京商学論叢』第四一巻第一号、中京大学商学会

原田忠直 1997a 「上海における出稼労働者の行動様式

——自営業者を中心に」『日本福祉大学研究紀要』第九七号、日本福祉大学

原田忠直 1997b 「上海における出稼ぎ労働者の定着化」『日中経協ジャーナル』九一〇月号、日中経済協力会

原田忠直 1998 「上海における出稼ぎ自営業者の誕生」『日中経協ジャーナル』一〇月号、日中経済協力会

原田忠直 2009 「現代中国社会分析試論——三元的社会構造としての民工問題」日本福祉大学研究紀要『現代と文化』第一一九号、日本福祉大学福祉社会開発研究所

原田忠直 2013 「包」についての一考察——鄧小平と「擦辺球」『現代と文化』第一二七号、日本福祉大学福祉社会開発研究所

原田忠直 2014 「現代中国における「包」と「発展のシェーマ」についての一考察」愛知大学国際中国学研究センター編『中国社会の基層変化と日中関係の変容』日本評論社

原田忠直 2016 「農民工からみた中国社会——ある一枚の写真から読み解く中国社会」『中国21』Vol.44、愛知大学現代中国学会編、東方書店

原田忠直 2017 「包」の「特殊性」から読み解く「中国経済のシェーマ」——柏祐賢と加藤弘之が探し求めた中国研究の核心」(その一)『ICCS現代中国学ジャーナル』第一〇巻第一号、愛知大学国際中国学研究センター

原田忠直 2019 「包」の特殊性から読み解く「中国経済のシェーマ」——柏祐賢と加藤弘之が探し求めた中国研究の核心」(その二)『ICCS現代中国学ジャーナル』第一二

121——農民工は「悪魔の挽き白」にすり潰されたのか

- 巻第一号、愛知大学国際中国学研究センター  
原田忠直 2020 「中国における市場の「自由」と「包」につ  
いての一考察」日本福祉大学研究紀要『現代と文化』第一  
四〇号、日本福祉大学福祉社会開発研究所  
カール・ポランニー 1980a 『人間の経済Ⅰ』玉野井芳郎・  
栗本慎一郎訳、岩波現代選書  
カール・ポランニー 1980b 『人間の経済Ⅱ』玉野井芳郎・  
中野忠訳、岩波現代選書  
カール・ポランニー 2003 『経済の文明史』玉野井芳郎・  
平野健一郎編訳、石井溥・木畑洋一・長尾史郎・吉沢英成  
訳、ちくま学芸文庫  
カール・ポランニー 2010 『大転換』野口健彦・栖原学訳、  
東洋経済新報社  
カール・ポランニー 2012 『市場社会と人間の自由——社  
会哲学論選』若森みどり・植村邦彦・若森章孝編訳、大月  
書店  
カール・ポランニー 2015 『経済と自由——文明の転換』  
福田郁夫・池田昭光・東風谷太一・佐久間寛訳、ちくま学  
芸文庫  
カール・ポランニー 2019 『大転換——市場社会の形成と  
崩壊』野口建彦・栖原学訳、東洋経済新報社  
松井康浩 2003 「スターリン体制下の個人と親密圏」『思  
想』No.九五二八月号、岩波書店  
南亮進・牧野文夫・羅歆鎮 2008 『中国の教育と経済発展』  
東洋経済新報社